

細く強い、黒染めの糸を指に絡めて弄ぶ。もてあそ

私の大事な宝物。この黒い糸は私の誇り。

大切にし続けたこの糸は、私が誇れるものの一つだった。

これだけは誰にも負けない。例え他の何かが劣つていたとしても、これだけは負けない自信があつた。

ぬばたまのこの黒糸。

誰にも負けない私だけのもの。

初めの人と会つても、私はそれだけで超然ちようぜんといられた。

磨きあげ、整え、飾っていく。

みんなが誉め称え、羨望せんぼうの眼差しを向ける。

精緻な装飾は人に自信を与えてくれるのだ。

だから私はどこに行つても、人間関係で苦痛を覚えなかった。

自分に自信があるわけじゃ決してない。この美しい装飾が私を護る盾だった。

どんなに非力でも、全ての輕蔑やいばを弾く仮面たてがあれば、人は容易く傲慢ごうまんになれる。

私もまたその典型なのだろう。でもだからって驕おごつたりなんかしない。

仮面たてを磨きあげ万全とする私に抜かりなんかあるはずがなかった。

だというのに私の仮面たては消えてしまった。

忽然こつぜんと消え失せたわけではない。誰かに奪われたわけでもなく、じわじわと私の前から消え去つていったのだ。

その光景は地獄でしかなかった。自分の装飾が少しずつ自分の前から消えていく。

私は少しずつ戦場の只中で護るものを失くしていくのだ。

戦術など持つはずがない。私は自分を護り抜くことだけを考へていた。

そんな人間が武器ツルギを携える理由なんてない。

だから私は戦場から逃げ出した。仮面<sup>たて</sup>を失くして  
生き残れるほど、私は強くないのだから。

私を生かしてしてくれた装飾<sup>ベルツナ</sup>。それを引き剥がし  
たのは、他ならぬ私自身の中から膿み出されたもの  
だった。

それが悔しくてならない。愚かにも私は私によつ  
て生き抜く術を失くしたのだ。

人は装飾<sup>ベルツナ</sup>を被るもの。個<sup>じぶん</sup>を曝け出すことは罪でし  
かない。

汝<sup>なんじ</sup>、偽<sup>いつわ</sup>らざるを罪と知れ——己<sup>み</sup>が醜<sup>みにく</sup>さを仮面の  
下に隠し、装飾<sup>いろど</sup>を彩<sup>たま</sup>り給え

LADIES SPIRIT—01

七月——私はいつも通り、病室で日常を送っていた。

ベッドの上で窓の外を見つめながら、ただ漫然と日々を過ごす。長年運動をしていないため、筋肉さえ削ぎ落とされた細い腕からは点滴が伸び、私は間違ひなく病人だった。

今は梅雨だというのに、今日は晴天で暑くて仕方ない。こうなると病人の服というのは薄くて過ぎやすい。窓から滑り込んだ風が、服の中に入り込み素肌を撫でて去っていく。

それがとても心地よい。何一つ飾りをつけていな

い私の体に、夏のそよ風はとても気持ちがいいものだ。

誰もいない個室の病室で、私は専属医と数名の看護師としか会わない日々を過ごしている。それ以外の人はここ最近会った覚えがない。

専属医曰く、今日は顔色もよく比較的体調がいいので、院内を散歩しても構わない、と言っていたがどうしようか。

この時期にしては珍しく天気がよく、気分もいいので少しくらい散歩に出るのも楽しいかもしれない。今まではどんなに体調がよくても、病室で本を読んでいたのだが、買い溜めしたものはもう全て読んでしまった。さらに悲しいことにいつも本を買ってきてくれるはずの奴は、本日お見舞いには来てくれない。

そうなってしまうと暇だ。そもそも入院生活ですることなど限られている。読書やお見舞いの人達と

の談話だんわでしか暇を潰せない私のような患者は、そうそう新しくやることなど見つからないのだ。

看護師の一人である戸田とださんも気晴らしの散歩とすすか勧めてたしなあ……。

「うーん……」

あまり気は進まないけど、今のうちに慣れておくべきかもしれない。どうせ院内だけの付き合いだ。

多少の歪ゆがみは致し方のないこと。

それに大抵たいていの人はごく普通にここを去っていく。

私と同じ年代の人と死別しべつすることなんて滅多めったにない。

だからこそ、記憶にも残りにくいだろう。死の病やまいにかかっていたなら一瞬一瞬が大切だろうが、普通はそんなはずない。

入院生活中に喋った人をいちいち覚えてる人なんかないはずだ。それは私にとって好都合こうつごうといえる。

本当は誰かと会うのも嫌なんだけど、まあ、今は暇を潰すことが先決だ。

こんな退屈な場所で読書もできなかったら、私は溶とけてしまう。

「しようがないよねえ」

外界がいがいよりは少し軽蔑ヤイバが少ないだろうしね。

戦場っていうよりは天国に近すぎるし、楽園と呼ぶには死が多すぎる。

逆にこういう場所こそ、装飾ベルツナを薄くさせるのかもしれない。

ベッドから出た私はスリッパを足に引っ掛けて、またまたとおぼつかない足取りで車椅子に座った。長年ベッドの上で他者とは極力きくりよく接しなかった私の心身は、歩き方も人間関係の築き方も忘れつつあるのかもしれない。

少なくとも、車椅子なしでの移動はほとんどできない。こうやって少しの距離なら大丈夫だけど、部屋と部屋の間を移動するだけで足は簡単に音を上げ、呼吸みだは乱れてしまう。

なんとも脆弱に劣化してしまったものだ。私の心の全盛期とは比べ物にもならないじゃないか。

全く、過去の私と現在の私は似ても似つかない。

基本ステータスがあまりにも低下してしまっている。

しかしそれも自身を護るための装飾だ。

人よりも遥かに劣り、誰かの助けなしではまともに生きることもできない。さらに背景設定もばっちり出来上がっている。

それが今の私の仮面だ。あの頃の仮面と比べれば頼りないが、その頼りなさがまたこの装飾に力を与えてくれる。

これなら院内での生活はそこそ問題ない。

同情の対象なら蔑みを受けることはほとんどないはずだ。例えばそんな人がいたとしても、偽善者諸君が私を擁護してくれる。

昔と比べて卑怯で姑息で狡猾なのかもしれないけど、それでも何も飾りが無いよりはマシだろう。

虚飾だとしても、意味は十分にある。人間が本性を現せば、人間によって築かれる社会なんてあつという間に瓦解するからね。

かなり極まってきたドライビングテクで車椅子を扉の前まで運び、よっこらせとスライド式の扉を開ける。この扉さえ重く感じるあたり、私の腕は本当に使い物にならない。

病室を出ると、窓から射し込む陽光が私の眼を焼いた。

「眩しいなあ……」

九十度車椅子を回転させ、太陽の光を直視しないようにする。あまり浴びすぎると、モヤシな私はダメになりそうなので、人工の光があるところへ移動するとしよう。

まだ真新しい白い廊下をすいすいと進んでいく。悠々自適に暮らしてるなんてわけじゃない。これは病院という融通の違う場所で生き抜くために身につ

けた装飾だ。<sup>ベルソナ</sup>

素体<sup>フレイム</sup>だけで人は生きていけない。必ずその場<sup>ベルソナ</sup>に合わせた装飾<sup>ベルソナ</sup>を身につけなければ、そこに適合<sup>てきごう</sup>することなどできるはずがないのだ。

車椅子を移動させて開けた空間<sup>ベルソナ</sup>に出る。いくつかの長椅子が置かれた待合室で、患者<sup>まげ</sup>さん方が疎<sup>まば</sup>らに座<sup>ベルソナ</sup>っていた。

見るからに死相<sup>しそう</sup>が出てる感じの中年のおっさんに、新聞を熱心に読<sup>ベルソナ</sup>んでる殺しても死ななそうなお老体、ちよつと太りすぎな洋梨<sup>だっしよくむ</sup>体型のおばさん、あとはバンドでもやつてそうな脱色<sup>だつしよくむ</sup>無造作<sup>むぞうさ</sup>へアーという髪に優<sup>みじん</sup>しさが微塵もないかつこいい系の兄ちゃん。

そんな感じの方々がパジャマ姿でのろのろと時間を持て余していた。

全く……なんていうかみんないい感じに装飾<sup>ベルソナ</sup>つてゐるじゃん。十分すぎるほどに素体<sup>フレイム</sup>を隠している。

どっからどう見ても、外からやって来た普通の患

者様だ。みんな汎用型<sup>はんようがた</sup>なんだね、やつぱり。私はアインデンティティともいえる装飾<sup>ベルソナ</sup>だった仮面<sup>たて</sup>を失ってしまった。

一番必要なものを失ってしまった私から、汎用性は欠如<sup>けつご</sup>している。

神経<sup>しんけい</sup>研ぎ澄<sup>す</sup>ませて血眼<sup>ちまなこ</sup>にならなければ、その空間に適応<sup>てきおう</sup>することができない。全く不便な自分だと思<sup>ベルソナ</sup>う。

それほどの努力をしてでも素体<sup>フレイム</sup>は隠さなければならぬものだ。少なくとも私はそう思っている。

景色の一つとして何ら違和感のない患者達。その群れから外れた、なんか馴染<sup>なじ</sup>めていない人影に私は気付く。

自販機の前で、その人は呻<sup>しんぎん</sup>吟していた。悩ましげに眉を寄せ、自販機に並ぶ飲み物を上から下まで何度も見ている。

そんなことをしているのに、その人は見るからに

怪我人<sup>けがにん</sup>だった。頭に包帯を巻き、左腕にはギブスがつけられ、首にかけた包帯にぶら下げられている。右目には眼帯がされ、体のあちこちに包帯や湿布が見られた。

一体何がしたらここまで傷だらけになれるのか。その辺を小一時間ぐらい問い詰めたくなるような外見だ。

だというのに、その人の眼はあからさまに生きていた。なのになのに顔にはなんか覇氣<sup>はき</sup>がなくて、軽くだらけきっている。ブーの素質は十分にあると思う。

今時の若者に見られがちな無力系脱力感のある雰囲気<sup>ベルソナ</sup>を放っているが、それは装飾<sup>ベルソナ</sup>にしては身に染みすぎている。

きつと素体<sup>フレイム</sup>とよつぽど相性がいいんだろう。その点では、その人によく似合っているのかもしれない。

その日の私は本当にいつもとは違う気分<sup>きふん</sup>で動い

ていて、病室から外に出ることだって希少<sup>きしょう</sup>な私は、その日入院してから初めて自分の意思で他人に近づいた。

車輪を回し、自販機の前まで行きその人の背後に止まる。細い背中をちよつとだけ見つめ、勇氣や躊躇<sup>ちゅう</sup>もなしに私は自然と言葉を投げていた。

「何をしてるんですか？」

私の問いにその人は首だけで振り返る。不機嫌そうな顔をしているけど、顔立ちは結構可愛い方だ。

女の子なのになこんな傷だらけになつて可哀<sup>かわい</sup>想<sup>そう</sup>だな。なんていうかすぐくもつたいたい。

でも装飾<sup>ベルソナ</sup>としてはいいかもしれないかな。整った顔に華奢<sup>きゃしゃ</sup>な体、そこに包帯っていうのは確かにそそのものがあつた。

そういう趣味の人間がいることを知っている程度には、私も純情<sup>じゅんじやう</sup>じゃありません。かつこ、涙、かつこ閉じ。

その点では羨ましい。

「何？ それ、俺に言ってるの？」

「ん、俺？」

声は女のそれなのに、今この子は自分のことを俺と言ったの？

いや、僕少女なんていうのがあるのは知ってるが、それは需要が低すぎはしないだろうか。確かに一部の熱狂的地域なら頼もしいものになるかもしれないけど、ここでは適合できやしない。

折角素体はいいのに、そんなじゃさらにもったいないと思う。

呆けている私を怪訝そうに睨んで、その人はぼりぼりと頭をかいた。

「おーい、聞いてるか？」

「ん……あ、ああ、ごめんなさい。ちよつとびっくりしちゃって。まるで男の子みたいな口ぶりだったから——」

私の言葉にその子は顔をむすつと顰める。さつきから思うけど、この子には愛想がない。

全くいつもそんな不機嫌そうな顔をしていると、人間関係上手くないかないぞ？

その人は呆れ切ったようにため息を吐き出し、私をじとつと見据える。

う、結構怖いな。

「俺、男なんだけど」

「はひっ？」

一瞬、幻聴を聞いた気がした。この子は自分が女じゃないと言ってるのでしょうか？

分かった。これは高度な暗号だな。

私を舐めてもらっちゃ困る。それでもミステリ小説は結構読んでるぞ。やっぱり最近の若者が読むべきミステリーは講談社ノベルズだよねえ、とかって知ったかぶれる程度には！ 西尾維新しか読んでこ  
とないけどつ。



確かに胸は私に負けず劣らずつるべったんだけど、そんなわけはないだろう。私より全然可愛いっていうのに。

これで男ってのは詐欺だ。何かを奪われたわけじゃないけど、なんだか詐欺な気がする。

なんだか悔しい。全女性に対する嫌味でもあるかもしれないぞ、これは。

「男なの？」

「だからそう言ってるんだろ？ 全く、どいつもこいつも」

どうやら、この子はいつも性別を間違われるらしい。そりゃそうだ。こんなのが男だったら、性別の境目があからさまに分からなくなる。

嫌がらせのような悩みを持つてんじゃないか。

「可愛い顔してるもん、そりゃ間違えるよ。それで、何をしてたの？」

私の言葉に納得いかないような表情をしながらも、

彼は困り顔でジュースの並ぶ自販機を顧みた。かえり

「いやな、ちよつとジュース買ってきてくれて頼まれたんだよ」

「へえ……あなた怪我人よね？ 同室の友達にでも頼まれたの？」

「いや、見舞いに来た人」

……どんだけ。

最近の若者はマナーがなくなっていったけど、その典型なのだろうか。それにしても、こんな可愛い子をバシリに使うとは許せない話だ。

「でも、それなら早く買っていつちゃえば？」

「……ミルク味のレモンジュースを買ってきてくれて頼まれた場合、お前ならどうする？」

救いを求めるような彼の目。

「……どうもこうも、そもそもそんなの拒否るわよ」  
絶対に買ってこれるはずがない。私達は一休さんじゃないんだから、それに打ち勝つ方法なんか皆無

だ。

「じゃあ、もし拒否ったり、違うの買ってきた場合に暴力振るわれるような人だったらどうする？」

「……友達を考えて作りなさい」

救いの道がないので、とりあえずそれだけ忠告してみた。最もそれはもう手遅れかもしれないけど。

とりあえず、なんだろう。こういう場合に使う言葉がなんかあったはず。

あ、そうそう。ご愁傷様だ。  
しゅうしょうさま

「俺だって好きであんなのと知り合いになったわけじゃねえよ！ いや、出会いたくもなかった！」

「はいはい、院内では静かにね」

まあ、なかなか凄まじい様子だから荒れたい気持ちも分かるけど、これはさすがに患者さん方に迷惑だ。この子が煙たがられても私は一向に構わないけど、一括りにされてしまったら手に入れた仮面に傷がつく。

それだけはごめんだ。

しかしこの子、なかなか楽しいな。話してて楽しめるし、なんだか飽きない。

久しぶりだな、人との関係に疲れないのは。いつも神経使わないといけないのに、どうしてだろうか、この子との会話は普通に愉快だと思えてしまえる。

「なあ、なんか助かる術はあると思うか、あんた？」

「うーん、そこに助かる術がそもそも用意されているかが疑問だな、私は」

「やっぱりそう思うよなあ。絶対これ、俺に暴力振るための口実だよなあ」

随分サディスティックな人らしい。

かなり暴力的っぽいいし、こうやって口実を用意するのもまた酷い。  
ひどい

苦労性だなあ、こいつ。将来、人間関係で苦労しそうだ。

「それじゃ、何買うの？」

「……何買つても殺されるしな。とりあえず金もつたないから、何も買わずにしばらくあっちこっち歩き回ろうかな」

トラウマがあるらしくて、なんか顔色が悪い。よっぽど酷い目にあっているみたいだ。

「じゃあ、私も一緒にいいかな？ 私も暇なんだよね」

「……別にいいけどよ。全然楽しくないぞ？」

「いいよ。あなたといると飽きないし」

私の言葉に彼は顔を顰めた。む、今度は何がいけなかったんだろ。

なんていうか単純そうに見えて、意外と気難しいな。

「俺は見世物みせものじゃないんだけどな」

「あ……ああ、ごめんなさい」

ぶっちゃけ見世物だと思ってますとも。

だって、なかなか見てて楽しめるじゃん。これは

いい見世物だと胸を膨ふくらませていたよ。

「まあ、いいじゃない。ねえ、中庭の方にいい？ 私、外行きたいな」

「ん、ああ、別に構かまわないけどよ」

相変わらず不承不承ふしょうふしょうって感じだけど、なんとなく

分かった。この人はなんだかんだお人好しだ。不機嫌ふけんそうな顔は彼なりの仮面たてらしい。

私のように他者との関係を有利に築くための仮面たてではなく、他人と極力深く関わらないための。お人好しな自分自身が背負せおうモノを少なくするためのものなんだろう。

それでもこの人は結局お人好しでどうやっても他人を助けちゃうんだね、きっと。

装飾ベルソナを見れば、その人の内面なんて大体分析ぶんせきできる。こんなのは簡単だ。

少なくとも——ただの会話にさえ神経を研ぎ澄ませる私には、ね。